



UU now

発行：宇都宮大学 編集：広報室
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026
URL <http://www.utsunomiya-u.ac.jp>
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

トップレベルを目指す

とにかくサッカーが好き

OB INTERVIEW



大田原市サッカー協会会長

高久 勝美

Takaku Katsumi

【たかく かつみ】1938年、栃木県大田原市生まれ。62年、宇都宮大学学芸学部（現教育学部）卒。同年、西那須野町立三島中学教諭。68年、栃木県立黒羽高校教諭。70年、同矢板高校教諭。72年、同矢板東高校教諭。90年、同大田原高校教諭。99年、定年退職。北那須サッカー協会会長を兼任。

若き頃、俊足の強力FWとしてその名が全国に知られた高久勝美さん。栃木県のサッカーが輝きを放っていた時代の主力選手として活躍、その後、指導者の道を歩む。「蹴球」から「サッカー」へ。日本サッカーの黎明期に、幸運にも最先端の技術理論に触れる機会を得、無名だった高校を栃木県を代表する強豪校へと導いていった。

取材：大学院教育学研究科2年・大平准之、同・山口佐知子、同・増山明恵、大学院工学研究科2年・村田大誠

■「世界のサッカー」を知る
高久さんは卒業後教員となり、た高久さんは卒業後教員となり、栃木SC（Jリーグ2部）の栃木サッカーに加わった。チームの俊足FWの加入で、それまで低迷していたチームの戦力が大幅にアップ。1962年、宇大サッカー部時代、関東中・大田原内最高レベルの大会だった信越大学体育大会で連覇を飾った国体に8年ぶりに出場を果たす。以来3年連続国体ベスト8の輝かしい実績を残した。

その時代は、日本サッカーの一大変革期でもあった。東京オリンピックを控え、日本代表チームの指導のため、後に「日本サッカーの育ての親」と呼ばれるクラマー氏が60年に来日。高久さんが大学生の時だった。「偉大な指導者により、日本のサッカーのすべてが変わった。これが世界のサッカーなのか」と驚かされた。

■「数学」から「体育」へ
サッカーとの出会いは小学生時代。下校途中、中学校の校庭で先生と生徒がサッカーの練習をする光景を目にした。なぜか

大きな体の先生が豪快にサッカーボールを蹴飛ばす姿に強烈な印象を受けた。「中学校に入ったら、このスポーツをする」。そう心に決めた。以来、高久さんの人生にサッカーは欠かせないものになった。

教師だった父の影響もあり「数学（算数）」の教師を目指し学芸学部に入學。いま思い浮かぶ大学生活は「サッカーに明け暮れた毎日」という。「運動部といっても、けっして強制的なものではなく、サッカーが好きで集まってきたメンバーばかり。それぞれが自主的に技を磨いた」。自由な気風、そして部員同士の大らかな交流。サッカーを通して少しずつ「体育教師」への思いを募らせていた。

ある日、陸上競技の授業に飛び入りで参加した。「走ることも跳ぶこともレベル以上の記録を出せた。自分の力が通じることを知った」。それが「体育教師」を本格的に目指すきっかけになったという。「グラウンドの感触が私に合っていたというか、縁があったのでしょね」。

卒業後、中学校の体育教師に。栃木サッカーの選手として活躍した期間は短い。仕事が忙しくなり選手生活にピリオドを打ち、指導者としての道を歩み始める。初めて監督をした中学校のチームがいきなり県大会で準優勝したことで、「指導者の面白さを知った」。やがて、矢板高校サッカー部の監督として迎え入れられ、2年後、同校から分離・独立した矢板東高校の監督となる。

同時期、那須に「湘南ベルマーレ（Jリーグ1部）」の前身「藤和不動産」サッカー部が創設された。雪で練習場が確保できない期間、「藤和」の選手たちは矢板東高校のグラウンドで

練習した。その中にはセルジオ越後氏（現サッカー解説者）の姿もあった。監督、選手から最先端の戦術・技術を教わった。「矢板東には、優れたサッカー理論が根付いていた」。

県北の無名チームは、やがてインターハイ、全国高校サッカー選手権に出場する強豪校に。「鬼怒川より北にある高校は、強くない」と言われ、意地を張っていたところもあった。教員生活の最後は、「母校のサッカー部を立て直す」ため希望して大田原高校に赴任。同時に、大田原市サッカー協会の創設に尽力。「この地域に、サッカーを普及させたかった」。

サッカーを楽しむ

今年の正月、高久さんは国立競技場で、全国高校サッカー選手権準決勝の矢板中央高校の試合を観戦した。栃木県勢として24年ぶりに4強に入った同校の監督は矢板東高校時代の教え子であり、監督になることを勧めたのも高久さん自身だった。定年退職後は、同校サッカー部の強化にも協力していた。

いまは、「ねんりんピック」出場を目標とする「大昭クラブ」の監督兼プレーヤー。クラブには大学時代の仲間もいる。「若い人たちの技術と比べたら、とてもサッカーと言えない代物ではない。でも、とにかくサッカーが好き。サッカーがマイナーだった時代を経てきた人は、サッカーを楽しむことを知っている」。

写真撮影のため、宇大のグラウンドに立った高久さん。ユニフォームからのぞく鍛えられた肉体は、とても71歳には見えない。このころ何もう変わっていない。いまでも、足は速いですよ」。

（文・ピオス編集室/撮影・木原悠葉）